

## 宮古島与那覇方言のアクセントと3拍のフット

日本女子大学/ 国立国語研究所 松森 晶子

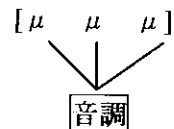
これまでの記述研究では、宮古島<sup>よなは</sup>与那覇方言のアクセント型の区別は明瞭ではなく、「1型体系にごく近い」とされてきた(平山ほか 1967, 崎村 2006)。これに対し本発表では、この方言には明瞭に区別される2つの型が観察されることを報告する。発表では、この2つの型の区別が特に明瞭になるのは、名詞が3モーラ以上で、その3拍以上の名詞の後ろに meRdu (並列助詞 meR+焦点標識 du) や NkeRdu (向格助詞 Nkee+焦点標識 du) など、3拍以上の助詞連続が続いた場合であることを、次のようなデータを提示しながら報告する。

(1) 3モーラ名詞に meRdu、が後接した場合

{	[AB型]	kuruma	meRdu	… (車も…)		aVva	meRdu	… (油も…)
	[C型]	katana	meRdu	… (包丁も…)		pasaM	meRdu	… (鉄も…)
{	[AB型]	suNna	pari	N keRdu	(葱畑に…)			
	[C型]	tamama	pari	N keRdu	(キャベツ畑に…)			

このような音調型の違いを説明するために本稿では、Shimoji (2009)が伊良部島のアクセントを記述するにあたって提唱した「フット」という概念を採用し、与那覇方言では「3モーラ」がひとつの単位となってフットを形成して、そのフット全体にH音調、あるいはL音調が指定されることを提唱する。

(2) 与那覇方言における音調指定



またこの方言では、2モーラ名詞が、後続する助詞によって、たとえば次のようなアクセント交替を示すが、その原因も、このフットを使用して考察する。

・ nudu、Ndu が後続    ○●▲▲    nabi nudu (鍋が)、nabi Ndu (鍋に)

・ nu (属格)が後続    ●●▲    nabi nu naka (鍋の中)

さらにこの方言では、2拍名詞に一部の助詞がついた場合に型の区別が見えなくなる、いわゆるアクセントの中和現象がみられるが、なぜ、そのような現象が起こるかについても、3拍のフットと、それに課せられる制約によって説明を試みる。